

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5 二〇二一年四月十九日
永瀬清子の光を受けて vol. 1

あけがたにくる人よ

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 伊藤さん、永瀬清子さんをご存知ですか？

伊藤 はい。国立ハンセン病療養所の長島愛生園に詩の指導に通い続けたと聞いたことがあります。

小林 第三月曜日のこの時間は、「永瀬清子の光を受けて」と題して、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。赤磐市教育委員会熊山分室の白根直子です。よろしくお願いたします。

小林 さて、初回となる今日は、永瀬清子さんはどんな女性なのかということをお話したいと思います。

白根 永瀬清子さんは、明治三十九年二月十七日に現在の岡山県赤磐市松木に生まれ、平成七年の八十九歳の誕生日に生涯を閉じるまで、生涯現役の詩人を貫いた「現代詩の母」です。多感な時期を金沢・名古屋で、結婚して大阪・東京で暮らし、昭和二十年に夫の転勤で岡山市に帰りました。戦後に現在の岡山県赤磐市松木で農業に従事しながら詩を書き、



『あけがたにくる人よ』
思潮社 1987年6月
挿画 西本多喜江
提供 思潮社

詩の雑誌「黄薔薇」を創刊。岡山県詩人協会の初代会長も務め、後に続く詩人を育てました。また、ハンセン病の入所者とともに詩を書き、選挙により豊田村の教育委員、岡山家庭裁判所の調停委員、世界連邦運動に参加、近代岡山の女性史研究を行うなど幅広い活動も知られています。

小林 二月十七日の誕生日にお亡くなりになったということで、紅梅忌には、今も永瀬さんを慕う方々がお参りをなさっていますね。今、永瀬清子さんの詩を読む意味や理由について、どんな風にお感じでしょうか。

白根 永瀬さんの詩や生き方は、今を生きる私たちにも学ぶところがあり、世界を新しい見方で見ることができ、その見方を手に入れることができる場所があると思います。また、生きるヒントになることや共感できることがあります。その詩と共に歩むように読むことができるのも魅力といえるでしょう。

小林 今回は、代表作のひとつ「あけがたにくる人よ」を朗読させていただきます。

あけがたにくる人よ

あけがたにくる人よ

ててっぽっぼうの声のする方から

私の所へしずかにしずかにくる人よ

一生の山坂は蒼くたとえようもなくきびしく

私はいま老いてしまつて

ほかの年よりと同じに

若かつた日のことを千万遍恋うている

その時私は家出しようとして

小さなバスケット一つをさげて

足は宙にふるえていた

どこへいくとも自分でわからず

恋している自分の心だけがたよりで

若さ、それは苦しさだった

その時あなたが来てくれればよかつたのに

その時あなたは来てくれなかつた

どんなに待っているか

道べりの柳の木に云えばよかつたのか

吹く風の小さな渦に頼めばよかつたのか

あなたの耳はあまりに遠く

茜色の向うで汽車が汽笛をあげるように

通りすぎていつてしまった

もう過ぎてしまった

いま来てもつぐなえぬ

一生は過ぎてしまったのに

あけがたにくる人よ

ててっぽっぼうの声のする方から

私の方へしずかにしずかにくる人よ

足音もなく何しにくる人よ

涙流させにだけくる人よ

(『あけがたにくる人よ』思潮社 一九八七年六月)

小林 伊藤さん、いかがですか？

伊藤 聴き入ってしまいました。

小林 「ててっぽっぼう」の声って、何の声でしょう。

伊藤 鳥のさえずりかなと思いましたが。全体を聴いた時に、「私」は

遠くの場所にいってずっと(「あなた」に)近づくことができない。つまり、

大事な片思いの人が亡くなってしまつて、その人がその世界から呼んで

いるんじゃないかと解釈しました。

小林 素敵な想像力ですね。白根さん、この「あけがたにくる人よ」は、

永瀬さんのおいくつの頃の作品でしょうか。

白根 この詩は、一九八五年七月に発表した七十九歳の時の詩です。永

瀬さんといえば「あけがたにくる人よ」といわれるほどで、晩年の代表

作のひとつです。老いてなおみずみずしい心を詩に書いており、老若男

女を問わず愛され、評価されている詩です。この詩が生まれたのは、永

瀬さんが上京していた時です。朝早く山鳩の声がしきりに聞こえてきて、自分の書きたいことがいつになく意外にはつきり浮かんできた。そして昼近くに新宿の喫茶店で一気に書き上げたそうです。永瀬さんは、詩を書くときに一番大切なことを一行目に書きます。その一行が書けたら、それを受けて二行目、さらに三行目が生まれていき、そこにリズムが生まれると考えています。この「あけがたにくる人よ」は、一気に書き上げることができた、まさにそうして生まれた詩です。この詩を表題作とした詩集『あけがたにくる人よ』は一九八七年六月に出版され、地球賞と現代詩女流賞という二つの賞を受賞しています。

小林 「あけがたにくる人」とは誰ですか、と聞かれることが多かったそうですね。

白根 そうなんです。永瀬さんは聞かれるたびに困っていたそうです。具体的なモデルがいたわけではなく、永瀬さんが書いていらっしやるように『詩』が来てくれた事が一番当たっているのではないのでしょうか。この詩は積み重ねの中から生まれた詩であることも書いていらして、私もその通りだと思います。永瀬さんの詩と生き方は切り離して考えられないところがあります。人生一〇〇年時代を迎えようとする今、永瀬さんが苦しみや憧れを抱きながら懸命に生き、晩年になって「あけがたにくる人よ」のような詩を書き上げた時に、ここに至るために書いてきたのだ、と思ったことを知ると、老いていくこと、年を重ねていくこと、すばらしさを感じます。

小林 私がこの詩に出会ったのは、三十代初めの頃でした。四十代になってみると、また一層味わい深く感じるができますね。

白根 まさに、そういうところだと思います。永瀬さんの詩の魅力はいろいろありますが、まず挙げたいのは、書かれた詩の世界が共感しやす

いところですね。詩はむずかしい、わからないと言われることがあります。

それは、詩に書かれている内容、つまり詩の世界観に共感できない、共感できないためにむずかしい、わからないということがあるからです。その点、永瀬さんの詩は、共感しやすい詩が多くあります。なぜならば、最初に申しましたように、永瀬さんは十七歳から詩を書きはじめ、約七十年に渡り書き続けているので、自分の人生のステージや生活に合わせ、読むことができます。永瀬さんの詩の題材はいろいろあります。たとえば、多感な時期の悩み、結婚について、家族のこと、生活の中の驚きや発見、山や川、植物や天体など自然について、世の中について、老いについてなどです。ですから、永瀬さんの詩を読むことで、過去の自分を振り返る、今の自分の在り方を考えるこれから行く道の道しるべにするなど、自分の人生と一緒に歩いてくれるように読むことができるのです。

小林 伊藤さんは今二十代で「あけがたにくる人」とはどういう人かと想像しましたがけれど、伊藤さんが年を重ねるにつれ、この詩の味わい方が変わってくるんですね。永瀬さんがこの詩を七十九歳の時にお書きになったということで、私もその頃にあらためてこの詩を読んでみると、また違う感じ方になるんだろうなと想像します。本当に永瀬さんの詩は、深い魅力がありますね。

白根 深い泉の水を汲むような魅力があると思います。

小林 白根さんには、来月からもいろんなお話をお聞かせいただくこと、楽しみにしています。ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二二年四月十九日現在のものです。

〈参考文献〉

永瀬清子「あけがたにくる人よ」『詩字』第四十巻第八号 一九八五年七月

永瀬清子「詩のくる時―老いの目ざめについて」『女人随筆』六十四号 一九九二年一月

豊崎由美十広瀬大志「連載 カッコよくなきゃ、ポエムじゃない!」⑥ カッコいいし、

難解詩」『現代詩手帖』第六十四巻第四号(四月号) 二〇二二年四月

中村不二夫「山村暮鳥と『下手な詩』」『詩と思想』第三巻第四〇四号(四月号) 二

〇二二年四月